

卒業論文私見

伊藤嘉夫

大学に学ぶ本来の目的は、専門の學術の学習と研究を通して、英知と創造性に満ちた人格形成を目ざすものである。人間の長い歴史の上に堂々として築き上げられて来た文化と、理論体系を持つ学問の専門分野の上に、更に筆頭一步を進める真理の究明こそは、現代人の責任であり使命でもある。これをはたすものは大学であり、その教師であり学生である。

大学教育は授業科目を設け、単位を定め、科目ごとの単位の集計の条件に合して一定の数に達することによって卒業が認められるものである。授業科目はその名の通り業をさづけるのであるが、授業は授ける者と受けとる者の間に成りたつものである。授業科目は、講義、演習、実習にわかれ、講義課目は、すでに開かれたる、又は開かれんとする真理を解明し、学習によって自得理解せしめるものであり、演習科目は、教師と学生の間に応答討議し、真理をたしかめあうことにより、自ら新しい真理を発見しようとするもので、しかもこれらは学生と教師の対面の間に行われるものである。ここに人と人とのコミュニケーションションがあり、ふれあいがあり、その間に啓発され自得することが多い。これらの授業は、例外をのぞけば、教師と学生は一對一ではなく、一對特定数の学生の教室を場として行われる。然しこの一對特定数の特定数が、限度をこえた多数の場合

は全くその効果を薄め或はほとんど無に等しくなるもので、本の如く小人数の対面授業においてはじめて効果があがる。

大学生生活の上において見のがし難いものは、学生相互に於ける生活活動である。或はクラブ活動、自然発生的交遊グループの間におこる友情であり、活動である。クラブ活動においては、文芸、演劇研究、スポーツ、園芸、芸術などそれぞれ趣味、嗜好を一にするものの集団交遊は、階級と地位の平等な理想社会である大学の四年間の学生生活の重要な部分を占める。これらは人間的親近の最もながく続く人間関係を結ぶこととなる場合が多いと思われる。一つには人間鍛練の期間ともなる。かくして大学における人間形成を遂げられるのである。

大学によっては卒業論文を課さないところもあると聞くが、大学の教育課程における授業科目の多様性が、ともすれば求心性を十分に発揮することの出来ない恨みが無いとは言えないのである。そういう場合、卒業論文は、学問専門部門の研究にあつたの求心性の核になるものである。

本学においては、創設の当初から、第三年次から、卒業論文につながるゼミナールを課している。そして、三年、四年と二年間にわたつて、原則として同一教師によるゼミナールを継続して受講するようになっていた。このゼミナールを通じて、文

学研究の方法論や、本質的文芸論を具体的な古典を通じて、主題に対する討議をふくむ演習、輪講、資料の分担調査、基本資料の文献的研究、補助科学に対する取扱いにおける限度の問題等が討議されたりすることもあれば、作者研究における歴史的研究法の演習などもされた。このほか、ゼミナールの校外活動として、教師と学生が合宿研究に数日もつたり、文学遺跡、遺品調査などの旅行を行ったりした。ゼミナールの人数は、数名乃至十数名で、時に二十人を少々超すくらいが最も大きなゼミナールグループであった。小人数が同一教師の指導のもとに、おおむね同一指向の卒業論文を考えている集りであり、これが毎週机をならべて、討議演習発表などをくりかえし、時には旅の喜びを共にし、合宿の行動を共にしたりして、大学生活の後期二年間を過し得ることは、大学生活における深い印象となることであろう。教師と学生、学生同志の交誼と親愛の情の交流は、場を同じうし、指向を同じうした研究という相似の心境と時間的共存のかもしれない。人間的親愛と信頼が、結びあわされて人間愛の成果となり、大学生活における人と人とのよき関係が展けるのであった。

大学生生活後期三四年の二ヶ年にわたる継続したゼミナールにおける成果については述べたが、これらは究極には、卒業論文につながるものであるから、早い頃から卒業論文のテーマを模索するものもあれば、のんびりと三年の終になっても一向に研究目標がしぼれない者もある。然し大方は三年の終ころには大よそにきまる。春やすみが比較的長いのでこの休暇期間に卒業論

要な期間である。四年の新学期に入ると、各学生がゼミナール指導教師の許で、卒業論文のテーマと論文の構想などについて述べ、教師から意見と指導をうけ、資料を集め論文作成に入り、四年の夏やすみに第一草稿本が出来れば上出来で、夏やすみの終ったころから草稿がはじまり、大車輪で十二月の提出日にまにあわずという泥縄式のものもあるが、ともかくにも十二月二十日頃の論文締切の窓口には、ほとんど間にあわせるようである。時間的にも意欲的にも、卒業論文は、大学生活に占める量感はいささか小さいものではない。卒論のための三、四年のゼミは各二単位、卒論は六単位、あわせて十単位。卒業に必要とする専門六六単位中一〇単位は、残りの単位に対して一七%にもあたる。卒論に費される時間は四五〇時間。これだけの時間と労力が費され、まとめ上げられた卒業論文の中に、たとえそれが小さい発見でも、見事に論じ上げたという新見の書き上げられたという喜びは、人間のみが持つ喜びである。そのような学問的喜びを持つことの出来た人は必ずしも多くはなかったであろうが、ともかくも精一ぱい書き上げた喜び、あるいは満足すべき結論は得られなくても、二年間に追い求めた結論に迫り得たことで心を慰めたりする。ともあれ真理を追求してたとえ時間切れになったとしてもとにかく一応の満足はあろう。卒論をまとめるに對してその労作によって、学問そのものの深遠さを知ったり、自分の知識、能力の限界や、未熟さを知り得ただけであったとしても、そうでなくては得られなかったらう貴重な人生体験となるものであろう。とにかく、卒業論文は、自分の力の限界を試すような意気込で、全力投球をすべきであらう。